

## 日本語力向上のための初年次教育の実践

### 日本語教員と看護科教員の協働による下位クラスの学生に対する「文章表現」の取り組み

- 1) 川崎医科大学 語学教室  
2) 川崎医療短期大学 看護科

橋本美香<sup>1)</sup>・新見明子<sup>2)</sup>・黒田裕子<sup>2)</sup>

(平成24年9月28日受理)

Implementation of a First-Year Experience Initiative for Improving Japanese Language Skills:  
The Written Expression Program for Lower Class Students through the Collaborative Teaching  
between Instructors in Japanese and Nursing

Mika HASHIMOTO<sup>1)</sup>, Akiko Niimi<sup>2)</sup>, Yuko Kuroda<sup>2)</sup>

*1) Department of language, Kawasaki Medical School  
577 Matsushima, Kurashiki, Okayama, 701-0192, Japan*

*2) Department of Nursing, Kawasaki college of Allied Health Professions  
316 Matsushima, Kurashiki, Okayama, 701-0194, Japan*

*(Received on September 28, 2012)*

#### 概 要

川崎医療短期大学では、初年次教育として日本語に関する講義である「文章表現」を開講している。日本語力については、大学のユニバーサル化に伴い低下していることが問題となっている。この対策として、入学時に国語のプレースメントテストを実施し、日本語力の測定を行っている。この結果にもとづき、看護科で行われている習熟度別クラス編成による「文章表現」の講義において、効果的な教育を行うことを目的として、下位クラスにおいて、日本語教員と看護科教員の協働による講義を実施した。講義内容は、文章力を向上させるためのものであるが、この中に国語のリメディアルの要素も取り入れ、国語の基礎学力の向上も試みた。

この結果、専門教育やキャリア教育と「文章表現」で学ぶ日本語力が連動していることを認識することができ、積極的に取り組むことができた。さらに、日本語力の低い学生においても大学での学習に必要な日本語力を養成できた。以上のことから、日本語教員と看護科教員の協働による下位クラスの学生に対する講義は、有効であることが明らかになった。

キーワード：初年次教育，基礎学力の向上，習熟度別クラス編成，協働，リメディアル教育

#### Abstract

The decline in Japanese language skills due to the universalization of higher education is a rising problem in Japan. In order to address the issue, Kawasaki College of Allied Health Professions provides a written expression course in Japanese language as a first-year experience initiative. In this course, proficiency-dependant class formation is employed based on the

assessment of Japanese language skills upon school entry using a placement test. In 2010, a collaborative teaching program between instructors in Japanese and nursing for lower class students was launched in this course for the purpose of providing effective education. This new program aims to improve basic academic ability in Japanese language as well as writing ability by introducing the concept of developmental education.

Our findings suggest that collaborative teaching between instructors in Japanese and nursing is effective for improving lower class students' basic academic ability in Japanese language. The teaching team recognized the positive relationship between Japanese language skills developed through the program and various areas including specialized education and career education, and actively implemented the program. Through this initiative, sufficient Japanese language skills of lower class students for university education was nurtured.

Key words: first-year experience, improvement of basic academic ability, proficiency-dependant class formation, collaborative teaching, developmental education

## 1. はじめに

川崎医療短期大学は、看護科、臨床検査科、放射線技術科、医療介護福祉科、医療保育科の5学科からなる大学である。日本語に関する取り組みは、2007年度から全学科共通で行なわれている<sup>1)</sup>。

入学時には、日本語に関するプレースメントテストを実施している。2007年度から2009年度は、語彙に関するプレースメントテスト、2010年度からは、語彙、表現、読解の分野の測定できる国語のテストを実施している。これに加えて、2007年度から、年度末には全学科、全学年を対象に同様のテストを実施してきた。プレースメントテストの結果について、学生間による点数の隔たりが大きいという問題がある。語彙力に関する追跡調査により、卒業時まで、語彙力が伸びない学生が存在することが明らかになった<sup>2)</sup>。

本稿ではプレースメントテスト結果に基づいた看護科での「文章表現」の講義で実施した看護科教員と日本語教員による基礎学力の不足している学生に対する取り組みについて、その効果と今後の課題について述べていくことを目的とする。

## 2. 看護における日本語力向上の必要性

看護における初年次教育とは、大学の学習への円滑な適応を支援するスタディ・スキルと専門への導入と組み合わせたものであり、このことを教育課程の中に位置付けることが重要であるとされている。一方で、専門への導入教育としての日本語力の向上は、実習ノートの記入や専門分野のレポート、病院実習でのカンファレンスなどにも欠かせないものである<sup>3)</sup>。しかし、本学の看護科は、3年課程でありスタディ・スキルを十分に伸張させるための時間的な余裕がなく、導入教育としての日本語力についてもまた、十分な時間がとれないのが現状である。このような状況の中で、「文章表現」の講義について特に日本語力の不足している学生には、高校までに学習している常用漢字に加えて、読解力や表現力を身につけさせる必要が生じる。

講義の中では、毎回新聞教材のワークシートを実施しているが、下位クラスの中では、読解する時間を多めに設定するだけではなく、内容説明、語彙説明、問題の解答など学生が理解できるように配慮している。一方で、新聞教材を使用することにより、メディアテラシの向上にも繋がるように心がけている。さらに、医療に

関する教材を使用することにより、導入教育としての側面も持たせている。

また、すでに指摘されているように、看護教育について教員の共通理解、意図性、継続性、一貫性を軸とする必要性があると考えられる<sup>4)</sup>。そのため、本学での協働による「文章表現」の実施は、日本語教員と看護科教員が日本語に関する共通理解をし、さらに、2年次以降への日本語力向上について一貫性をもって継続的に行なうことを目指すものである。

### 3. 看護科の「文章表現」実施の経緯

「1. はじめに」で述べたように、語彙に関するプレースメントテストを2010年度から国語（語彙・表現・読解）の測定するテストに変更した。このことにより、学生の問題点を詳細に把握できるようになった。特に、2011度の入学学生については、23点から91点までの学生が存在することが明らかになった。特に、看護科については、120名の定員であるため学科内での点数のへ隔たりも大きいという問題点があった。

その中で、分野別に見ると読解力が低い傾向がみられた。このことは、専門教育にも看過できない問題である。読解力については、OECDが実施しているPISAの結果においても、日本人の高校生（17歳）の生徒の能力が問題視されているものでもある<sup>5)</sup>。

このような状況の中、入学時のプレースメントテスト結果によって、「文章表現」においては3つのクラス（1クラス40名程度）に分け、授業を行なってきた。授業内容については、表1に示した。

この取り組みの中で、国語力の低い学生は、看護科のアドバイザー、担任、教務担当の教員から、「文章表現」の受講を推奨され、受講するものの、専門教育の勉強だけで精一杯という感覚に陥っていた。これにより、授業中の意欲が低い、出席率が低いなどの問題が生じていた。

表1 文章表現講義内容

|    | 講義内容                |
|----|---------------------|
| 1  | 作文の基本               |
| 2  | 表現力を身に付けよう (1)エッセイ  |
| 3  | 表現力を身に付けよう (2)短歌・俳句 |
| 4  | 表現力を身に付けよう (3)新聞活用  |
| 5  | レポート表現 (1)話し言葉と書き言葉 |
| 6  | レポート表現 (2)文法・構文     |
| 7  | 小論文 (1)課題文のない場合     |
| 8  | 小論文 (2)課題文のある場合     |
| 9  | 資料の調べ方              |
| 10 | 本の読み方 (1)内容         |
| 11 | 本の読み方 (2)評価         |
| 12 | レポートの書き方            |
| 13 | レポート作成 (1)構成        |
| 14 | レポート作成 (2)引用        |
| 15 | レポート作成 (3)推敲        |

\* 毎回の授業内容、使用する資料、試験については、共通

しかし、看護教育の基礎学力としても日本語力の不足は問題となるものであり、放置することはできないものである。

そのため、日本語力の不足している学生に効果的に日本語力を向上させる方策として、2010年度からレベル別のクラス編成に加え、下位のクラスについて看護科の教員と協働で実施することにした。講義については、内容の選定および実施は日本語教員が行い、看護科教員がサポートをするという方法で実施した。看護科目との関連付けについては、看護科教員から説明を行った。なお、講義の資料についてはすべてのレベルにおいて同じものを使用し、試験についても同様に学力による区別は行っていない。

### 4. プレスメーンとテスト結果

すでに述べたように、川崎医療短期大学では、学生の日本語力の経年変化を測定している。図1は、2011年度入学学生全体、看護科全体、看護科下位クラスの入学時と「文章表現」終了直後

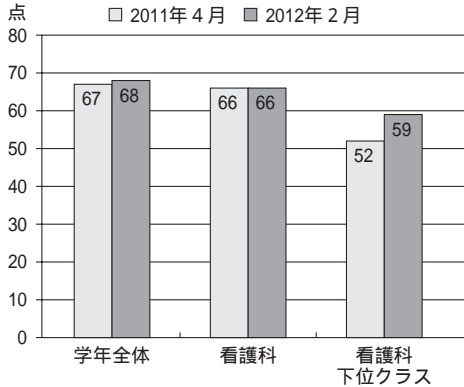


図1 2011年度国語プレースメントテスト結果

の年度末である2012年2月に実施したものである。学年全体では、1点の伸びを示しており、看護科全体では点数に伸びはみられない。これに対して、下位クラスは7点の伸びを示している。さらに、下位クラスの入学時と2012年度末の得点分布を示したものが、図2である。これによると、学年末には70点台、60点台の学生が18名と半数の学生が大きく点数を伸ばしている。

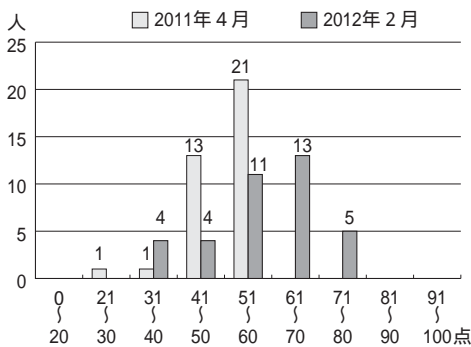


図2 下位クラスの国語プレースメントテスト結果

## 5. 学生の授業アンケート結果

本講義に関して、最終講義である15回目の講義で、授業アンケートを実施した。自由記述による文章表現に関する感想と、看護科教員と日本語担当教員の協働による講義についての感想を求めた。その結果を、以下に示すことにする。

### (1) 「文章表現」の講義についての回答

「文章表現」の講義については、学生自身が日本語力の向上について有効に働いていると受け止めている回答、専門教育に生かせるという回答、キャリア支援につながっているという回答などが見られた。以下に学生の回答を示す。なお、表現に問題がある箇所も見受けられるがそのままの形で提示した。

#### a. 日本語力の向上に関する回答

- ・漢字がすごく役に立つ
- ・新聞に興味を持てた
- ・小論文や、敬語や文章の繋ぎ方などのやり方が知れてよかった
- ・読解力がついた
- ・漢字を覚えることができてよかった
- ・日本語力が乏しすぎるので、勉強になることが多かった
- ・国語力がちょっとついたと思う
- ・日本語の基礎や今問題になっているニュースが知れたのでよかったと思います
- ・文の書き方などとてもよく分かったのでよかった

#### b. 導入教育に関する回答

- ・今後のレポートに活用したい
- ・レポートの書き方などは役立つからうれしい
- ・文章を書くのは苦手だが、レポートの書き方など分かりやすく教えてもらったので良かった
- ・いろんな文章を知り得たのでよかったです

#### c. キャリア支援に関する回答

- ・就職の時に役立つことも時々教えてくれたので、将来使おうと思う
- ・今後のレポート作成などに活用したい
- ・就職するときに必要な小論の書き方だの将来役立つことを習うことができたので良かった

- ・受講して良かった
  - ・これからレポートを書くときにいかしていききたい
  - ・コラムを今後も続けていけば、国語力が付くのだと感じた
  - ・日本語の基礎や今問題になっているニュースが知れたので良かったと思います
- d. 不満に感じたと思われる回答
- ・全体的に講義中にだらけている雰囲気だった
  - ・うるさい人が多くて集中できなかった
  - ・提出物が少し多かった
  - ・少し騒がしかった

## (2) 協働による講義について

日本語教員と看護科教員による協働に関する自由記述について、図3に回答を示した。回答率は95%（35名）となっている。この結果、「質問しやすいので良かった」と答えている学生が14名に上っていることは注目できよう。また、国語プレースメントテスト結果から推察すると苦手であると考えられる講義内容であるが、「看護科の視点から意見がもらえる」「楽しかった」「よかった」という回答がそれぞれ4名見られる。

## 6. 考察

### (1) プレスメンとテスト結果

入学時と年度末の結果を比較すると、看護科

の最も上位クラス、中位クラスの点数は伸びをほとんど示していないのに対して、入学時より点数は伸びを示していた。国語のプレースメントテストに対応した授業内容ではないため、ある程度の日本語力がある場合は、伸びを示さないことが、この背景にはあると考えられる。これに対して、下位クラスの学生については、基礎学力が不足していたため、ワークシートによる読解や、漢字の書き取りなどの実施が、有効であったと言えよう。さらに、この実践により、要旨がつかめるようになったことが読解力の向上にも繋がっていると考えられる。実際に、1年生後期に実施している全学科対象の「文章表現」受講者が応募した読売新聞大阪本社主催第9回「編集手帳見出しコンテスト」では、看護科の下位クラスの学生が優秀賞を受賞している。これは、全国の大学、短大、高校、中学、専門学校178校、23,842名の応募の中から、6点選ばれたものである。このことから、下位クラスの国語力は向上している一端が伺えると考えられる。

### (2) 「文章表現」の講義についての回答

先のアンケート結果から、「a. 日本語力の向上に関する回答」、「b. 導入教育に関する回答」、「c. キャリア支援に関する回答」にみられるように、学生は主体的に講義から学び取ったことを認識することができていると考えられる。特に、「a. 日本語力の向上に関する回答」

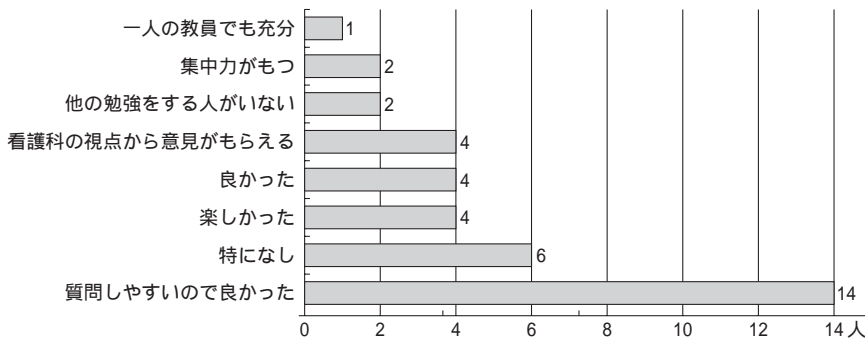


図3 授業アンケート2「二人の教員による講義の感想」

と分類したように、日本語力が向上していることを認識できていることは、下位クラスの学生にとって大きな収穫となっていると言えよう。また、「b. 導入教育に関する回答」として、レポートを書くことに役立つことを実感させることができたことから、看護科教員が講義に参加していることが優位に働いていると考えられる。

ただし、「d. 不満に感じたと思われる回答」として分類したように、学生に対して聞きやすい雰囲気となっていることが、一部の学生にとっては緊張感がないと受け止められ、また、質問に対する応答は、騒がしいと感じるものであることが判明した。これは、一つの質問について、一人の学生に対しての回答ではなく、数名が同じことを疑問に持った場合、回答の説明を複数に対して実施することや、学生同士の話し合いに発展することが影響していると考えられる。

### (3) 協働による講義について

日本語教員と看護科教員が協働で講義を実施することについて、1名のみが教員が1人でも構わないと回答しており、学生は概ね協働による講義に関して評価をしていると言える。特に、質問をできる雰囲気にあることを、非常に好ましいと考えていることが分かる。これについては、もともと読解力・表現力が低い学生が対象であるため、簡単な説明では理解が不十分なこともあるが、教員が本講義においては丁寧に質問に答えることができたことが、要因であると考えられる。

### (4) 日本語教員から見た効果

「文章表現」授業に真摯に取り組める学生は、専門の講義でも前向きに取り組む成績にも問題がないということが、看護科教員と協働で講義を行ない、学生情報を共有することによって判明した。この他にも、学生の性格や現在の状況について情報共有をすることができ、文章表現について指導する時に参考とすることができ

た。また、分からないことをそのまま放置せず、自ら考え、分からない点は質問するという習慣ができたと考える。文部科学省が2011年に発表した「大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会最終報告」において、専門職としての自発的な能力開発を継続するための能力や看護の向上に資する研究能力の基礎を育成することも重要であるとされている<sup>6)</sup>。そのため、下位クラスの学生についても、看護系の人材養成として必要な研究能力の基礎を育成することに繋がったと言えよう。さらに、文部科学省中央教育審議会大学分科会は2012年8月の答申案において、主体的な学修の体験を重ねてこそ、学生は生涯学び続け主体的に考える力を修得させるべきであり、そのためには質を伴った学修時間が必要であるとしている<sup>7)</sup>。これを実現するためにも、下位クラスの学生に対する看護科教員との協働による「文章表現」の取り組みは重要であろう。

以上のことから、専門の教員から日本語の講義と看護科の内容との関わりを説明することによって、学生に意欲的に取り組ませることができ、効果的な教育となっていると考える。

### (5) 看護科の教員の立場から見た効果

看護科教員として、講義を行なった印象は、看護科教員が思っていた以上に活字離れが進んでいるということである。このような学生に対して、「文章表現」の下位クラスの学生を観察した結果、看護に関する専門書に興味を持たせるための工夫が必要であることが明らかになった。学生が普段から目にしている医学書、看護学書が分からないということを、実際に理解することとなった。

授業内容について、論文検索や参考文献の書き方などは、看護学のレポートなどを書く時にも役立っていた。中でも、ブックレポートの作成に関しては、本を読む習慣のない学生が多いことから、興味のある本を探すと、文献の内

容を要約する、評価することに総じて困難を感じていた。しかし、この学習を通して看護の文献を読む、教科書から重要部分をつかむことの学習と密接なものであるため、その基礎学習について丁寧に指導を受けて学んだ意味は大きいと言える。さらに、学生の理解の仕方や講義の受け方から、関心の持たせ方や理解できたかの確認など、看護の講義の進め方に役立てることが出来ると考える。

習熟度別の授業を担当することにより、担任でない学生と身近に接する機会となり、その後も分からない点については物怖じせず質問をするようになったことは、収穫である。

これらのことから、「文章表現」の講義のみならず、専門の講義にも有効に働いていると考える。

## 7. おわりに

川崎医療短期大学で行なった、初年次教育として日本語に関する講義である「文章表現」では、国語のリメディアルの要素も取り入れ、国語の基礎学力の向上も試みたものであった。この取り組みは、習熟度別のクラス編成において実施した、日本語教員と専門教育の担当教員による下位クラスの学生に有効に働いていることが明らかになった。ただし、質問の応答などを行なうことによって、騒がしいと感じる学生も存在するため、このような学生に対する配慮をどのように行なうかについては、今後の課題である。

現在は、すべてのレベルで共通した内容を実施している。年度末に実施したプレースメントテストの実施結果は、下位レベル以外は、伸びをあまり示していなかった。この原因は何か、下位レベル以外の学生にとって日本語力向上のための有効な取り組みとはどのようなものかについて、検討することも今後の課題であると考える。このため、CERF (Common European

Framework of Reference for Languages)<sup>8)</sup>という、第二言語のためのヨーロッパ共通参照枠にみられるような習熟度別の参照枠を検討することも必要になると考える。

今回の執筆を行なっている看護科教員の1名は、習熟度別クラス編成当初から教務委員であった。また、もう1名は看護科の専門科目を担当しており、その中で実際にレポートを書かせる取り組みをしている。一方で、日本語教員は、専任教員として「文章表現」をはじめとする日本語に関する取り組みのコーディネートを5年間にわたって実施してきた。それぞれがこのような立場として、下位レベルの学生をはじめとした日本語力の問題について情報を共有することを試みてきた。このことが、下位レベルの学生に対する協働による日本語力向上の取り組みが、円滑に導入できた背景にあると言える。

また、2011年度以前に担当した下位レベルの学生が、日本語教員に対して1年次の反省点などを自主的に伝えるケースがある。その中でも日本語力を身につけておくべきであったという反省点を口にする学生も多い。これらの反省点について、1年生に伝えて欲しいという伝言を依頼されることもある。このように自分の反省点などについて、後輩に伝えていこうとする看護科の学生の気質と学科の伝統も、習熟度別クラスが効果的に行える背景にあることを記しておきたい。

なお、国語プレースメント追跡調査は、2010年度および2011年度大学教育・学生支援推進事業大学推進プログラム「学力向上のための総合的教育戦略」の助成によることを記しておく。

## 参考文献

- 1) 橋本美香, 山口恒夫, 兵藤文則: 川崎医療短期大学における語彙力に関する調査. 川崎医療短期大学紀要30. 9-15, 2010
- 2) 橋本美香: 国語リメディアル教育と大学生のた

- めの日本語教育事例集．大学における学習支援  
への挑戦（日本リメディアル教育学会監修）．  
京都，ナカニシヤ出版．2012．pp162-163
- 3 ) 山田礼子：初年次教育とは何か．看護教育50-5，  
376-381，2009．
  - 4 ) 三原祥子：学生に教員の意図を正確に伝える．  
看護教育53-4，416-420，2012．
  - 5 ) [http://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/  
education/detail/\\_\\_icsFiles/afieldfile/\\_menu/  
education/detail/2010/12/07/1284443\\_01.pdf](http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/__icsFiles/afieldfile/_menu/education/detail/2010/12/07/1284443_01.pdf)  
(2012年9月28日閲覧)
  - 6 ) [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa  
/koutou/40/toushin/\\_\\_icsFiles/afieldfile/2011  
/03/11/1302921\\_1\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/40/toushin/__icsFiles/afieldfile/2011/03/11/1302921_1_1.pdf)(2012年9月28日閲覧)
  - 7 ) [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chu  
kyo/chukyo4/siryu/\\_\\_icsFiles/afieldfile/2012/  
08/14/1324511\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/siryu/__icsFiles/afieldfile/2012/08/14/1324511_1.pdf) (2012年9月28日閲覧)
  - 8 ) [http://www.coe.int/t/dg4/linguistic/Cadre1\\_  
en.asp](http://www.coe.int/t/dg4/linguistic/Cadre1_en.asp) (2012年9月28日閲覧)